

鶴見俊輔の現代社会への視点について

木村倫幸

Kimura TSUNEYUKI

Shunsuke TSURUMI's Critical Approach to
the Contemporary Society

一

現代社会をどう考えるかという問題は、これと一体の関係にある近代国民国家をどう捉えるかという問題でもある。哲学者、鶴見俊輔は国民国家の問題について様々な機会に継続して論じ、それが近代以前の社会のそれぞれの地域における結びつきを破壊し、コンタリートのような特徴のない国民を形成してきたと指摘してきた。そしてここから離脱していく道は、国民として組織されていく前の、その土地その土地での自治、習慣の生活によって、自分自身と社会とを作っていく道であることを強調する。小論は、この方向性を最近の鶴見の主張に沿って検討し、その際に、特に鶴見に大きなショックを与えた二〇〇一年の九・一一テロに関連して、アメリカ社会においても、日本社会と同様の経過があったことを確認していく。

二

最初にアメリカ社会についての鶴見の論を見よう。鶴見は、二〇〇一・九・一一テロの後、現代アメリカ社会を考えるにあたって、ミレニアム（千年紀）という物差しで考えてみてはどうかということを提唱したが、その視点は、次の言葉に要約されている。

「(前略) 少し昔のことから話します。一九四〇年の夏、私はニューヨークのブロードウェイに立っていました。通りの向こうにTIMESの電光ニュースがあつて、それを見ていたのです。ちょうどナチスがヨーロッパで侵攻を始めたニュースをやっていました。その時、隣に立っていたアメリカ人が、『ナチスが何をやって、われわれは大丈夫だ。世界中の重要な発明・発見はすべてアメリカ人が成し遂げたものだから』と言った。私が何も言わずにいると、別のアメリカ人が『いや、二〇〇パーセントということはないだろう』と反論した。するとあの男が『いや、それでも九〇パーセントはあるだろう』と訂正しました」①。

「それを聞いて私は、アメリカもここまで来たんだなあ、と思いました。この会話はずっと忘れられない。『二〇〇パーセント』と思ひ込むくらいのことろまでアメリカは来てしまったあの一九四〇年の時間から今回の九・一一とそ

の後のブッシュの発言まで真つ直ぐ繋がっているとされます。テロ国家を全部やっつけてやるという十字軍みたいな発想まで。あれから六十年間の道をアメリカは真つ直ぐに歩んできた」(グ・五五～五六)。

ここでの鶴見の論理はこうである。アメリカは建国以来、ヨーロッパとは異なる独自の伝統を築き上げてきた。それはアメリカの風土に根を張った伝統であり、いわば土着の思想とでも名づけるべきものである。ところがこの伝統が今までは違う方向に向かって進んでしまっている。このことに気づかなければならない。しかし現在から考えれば、と鶴見は続ける。

「中間点が一つある。一九四六年にキーンランが立って『これは文明と文明でないものとの戦いだ』と言った。『文明』であるアメリカと『非文明』である日本という構図で、日本の戦争行為を検事として論告して断罪した。これが中間点だ。／それで今度のブッシュの十字軍発言。これを聞くと、この六十年アメリカは粛々と歩んできたなとつくづく感じる」(グ・五六)。

その後の現代アメリカを考えるにあたって、ミレニウムという単位を持ち出してきて考えると、次のようになる。

「三つのミレニアムのなかに、アメリカ人は自分たちの国を意識するようになったということね。ローマ帝国、神聖ローマ帝国に並ぶものとしてアメリカン・エンパイアが出てきた」(グ・五七)。

つまりアメリカは、自分たちの伝統を捨てて、国民国家の論理に方向転換をした、そしてその道を「粛々と歩んできた」ということである。その一つの結果が、九・一一である。しかしアメリカはこのことを自覚していない。

「六〇年前、アメリカは理想を持っていた。しかし今は、持っている物を失うまいとして、反動になっている。それに気づいていない。自分が民主主義を押し進めていると思っている」(グ・一六)。

このアメリカの変化に気づかせ、その本来の姿を再度自覚させていく必要がある、アメリカという地域に根づいた社会の復権を、鶴見は主張する。

三

そしてこのアメリカ本来の姿を検討する際に重要な役割を果たすのが、アメリカで発生した思想であるプラグマティズムが出てきた背景であり、この思

想初期の姿勢である。鶴見は、ここでの重要な事柄として「メイトリックス (matrix)」という概念を示唆する。これは初期のプラグマティズムを形成したメンバーたちが議論した中心的な概念である。この間の事情を鶴見はこう述べる。

「プラグマティズムっていうのは、妙なことだけど、言語から出発しないんですよ。自然とか家畜とか、そのやりとりである、自分自身のしぐさ、行動がはじめにあるんです。言語から、決して出発しないんです」②。

「メイトリックスというのは、母体という意味なんです。母体とか基盤。ですから、考え始める時に、そのもとに、なんだか未分類な unclassifiable matter (分類できないこと) があるでしょう。分類はカテゴリーなんですから、カテゴリーから出発しないんです。これは何かある。だから、デューイでいえば、メイトリックス、ジェームズだったら、ピュア・エクスペリエンス、意識とも未分の世界。(中略) だから、いまの、そのメイトリックスが重大なんです。母体というか、まだ分類もできないという元」(未・二六六)。

「メイトリックス」とは概念以前のものであるが、このような分類のできない状態があればこそ、それをバックボーンとして、アメリカ独特の風土にあった文化、習慣が生じるのである。これが核であり、これを保持することが重要なのであるが、しかし現在のアメリカは、これを忘れてしまい、自らを帝国として意識し、「民主主義」を世界に向かって押し進めている。

鶴見は、これを原プラグマティズム、「土法」としてのプラグマティズムと名づけ、ここに戻るべきアメリカの原点があるとする。それは例えば次のようなものである。

「さらにそのもとには、アメリカの土法がある。つまり、弾圧されて、ヨーロッパからクエーカーが逃げてくる。フランスからユグノーとかが逃げてくる。その連中は、そんなに金があるわけじゃないし、あとからやってくる移民みたいに、酒をインディアンに飲ませて、酔っぱらわせて、土地を奪うっていう悪知恵のある人物たちとも違う。だから、自分で木を伐って家をつくる。一種の万能人なんだ。そして、女が尊重される。女は少数だからね。家計を守る女をみて、自分の妻とするのは、大変なことなんだ。それは、土法の一部になる」③。

これがアメリカの原風景であり、プラグマティズムにはこの伝統が脈々と波打っている。

「形而上学クラブ」(プラグマティズムを最初に思想として確立した、パリスやジェームズらが参加したグループ——引用者)が始まったのが一八七二年とすると、アメリカ移住のときからずいぶん経っている。最初のプラグマティストから言えば、二〇〇年経ってるね。土法は、そこにある。さらに近いところにいるのが、フランクリン、ソローだ。ソローはむしろ追体験としてそこへ行っている。フランクリンの場合は、もともと金がないし、学校にもほとんど行っただけで、印刷屋の徒弟をしていた。それが原形なんだよ。そういう風にもみるのが妥当だろうね」(た・一九八―一九九)。

さらに次のようなエピソードも紹介する。

「連邦憲法をつくるとき、フランクリンは革命委員会の座長なんだよ。学生がやっているような、革命はいかにしてなされるべきか、なんていうのとぜんぜん違う。数人で革命法委員会というのをやっていて、その座長だったんだ。八〇歳を過ぎていて、よく居眠りをしていたらしい。アメリカの憲法の始まりはそういうところにあつて、そこにおもしろみがあるんだ」(た・一九九)。

以上のような原点が忘れ去られて、いまや全世界に「正義」を振り回し押し付けようとしているアメリカに対し、鶴見は根源的な批判を行う。

四

そしてこのアメリカと同類であり、もっと極端に進んでしまったのが日本の近代国家であるとする。前述のように、アメリカの分岐点を一九四〇年代に見た鶴見は、日本の場合その分岐点を一九〇五年に置く。そのことを端的に示しているのが、次の言葉である。

「日本も、明治国家をつくるのは一八六八年で、一九〇五年が日露戦争の終わりです。十九世紀に明治国家が始まったときは、たくさんの新しい幸福をもたらしたし、よかったです。二十世紀に入ってからのはほかの国々と同様に、国民国家という単位そのものに綻びがあり、いろいろな被害をもたらした」(ダ・三〇―三二)。

「その型は、一九〇五年に決まったんです。日露戦争の終わり、あそこで型を決めて、マニユアルを作った。(中略)一九〇五年からほとんど百年の型が、いまも続いているわけです。だから、敗戦の一九四五年で解体作業が終わった

と誤認している人たちがいるけど、実はしてないんだ。まだ続いているんだ」(未・三五九―三六〇)。

このことを鶴見は繰り返し述べるが、このところをやや詳しく説明している部分で、近著『かくれ佛教』④にある。それは一九〇五年、日露戦争講和の場面である。そのときの様子は、こうである。

「参謀本部次長の児玉源太郎は始める前から分かっていたんです。山県有朋の洋館で会合を開きますが、『やりましょう。だけど、自分がここで「やめ」と言ったら、必ずどんな不利な条件でも講和条約をのんでください』と言ったんですね。／その頃、重臣には力があつた。伊藤博文もいるし、山県有朋もいる。長閥の首相の桂太郎もいる。そこで、みんなの合意をとった。ついにそのときが来たんです。奉天会戦のあと、児玉源太郎は隠密裏に抜け出して東京まで来て、政府に『いまがそのとき。どんな不利な条件でも講和をしてくれ』と」(か・一〇六)。

これに対して、敗戦続きのロシアは、日露開戦に反対だったウイッテ伯を代表として出してきた、ルーズベルトが仲介に立った。しかしロシアの条件はきわめて厳しいものであつた。外相であつた小村寿太郎の対応は周知のごとくである。

「ポーツマス条約でウイッテは難題を出した。本当にわずかな割譲を譲歩するだけの条件を出してきて、外務大臣の小村寿太郎はそれをのんだ。小村は前の謀議の結論を知っていますからね。『万歳、万歳』で送られたけれども、自分が帰ってくるときは国民は自分に背を向けていると知って会談に入った。／あそこまで考えると、幕末、維新のリーダーはまだ生きていたんです。だから、合議が成立した」(か・一〇六―一〇七)。

ところが国民は、この事情を知らされないままであつたから、そこに食い違いが起こる、と鶴見は指摘する。

「国民の世論は一九〇五年に日本が世界の主立った国の一つになったと思っている。これは幻想なんです。講和の条件が気に入らなくて、日比谷焼き討ちなんてやっているけれど、もっと戦争をしろと言うんでしょうか。戦争を続けたら日本国はなくなってしまうんです。ロシアはゆっくりと軍隊や食料をシベリアを通して輸送してくるんですから」(か・一〇五―一〇六)。

しかしながら、この幻想がいまだに尾を引いて続いていることが問題である。

「でも、その国民を沸き立たせた幻想は、一九〇五年からずっと今日まで一〇〇年を超えて続いている。日本国民はまだその幻想のうちにいるんです」(か・一〇七)。

しかも第二次世界大戦の敗戦によるショックを乗り越えて、である。

「第二次世界大戦でUSAに負けただけで、負けたことはほんの数年しかおぼえていないんですよ。負けた途端には分かっていたと思うが、アジアの中でも日本は貧乏のほうです。(後略)／しかし、自分たちは世界の中の窮乏国になった、これからどうしたらいいかという現実の把握は、わずか数年しか続かないんです。なぜか。朝鮮戦争が起こったから。あそこで『漁夫の利』を得て、どんどん日本は伸びていくでしょう。そうすると、もとの長く続いた幻想へ戻ってしまった。日本は一流国だと思っちゃうわけ」(同)。

こう述べることで鶴見は、アメリカと日本双方の近代国民国家にある共通項をあぶりだす。すなわちともに、近代国家以前の土着の思想文化の基盤を忘れ、現在の状況のみをよしとする立場を固守していく姿勢が問題であるとする。

「日露戦争まではえらいんだよ。だけど、江戸時代の力が脚立になっているという現実を、明治の日本人は考えなかったんだ。外国人には『明治以前は野蛮なもんです』なんて言うんだよ。実は、そこに力があつたんだ。つまり寺子屋の教育が、明治の独特の力をつくつたんだ。／USAもおなじなんだよ。フランクリンも、ジェイムズも、ホウムズも、そういう文化と地続きで上がってきたから、大変なオリジナリティーがそこに生じたんだ。(後略)」(た・一三六)。

「その意味では、明治初期の日本とUSAはイソモルフ(同型)なんだ。日米の交歓は、両方が力を出し合って、非常に実りがあつた。内村鑑三が来ても、新渡戸稲造が来ても、米国人は彼らが高く評価した。いまのブッシュ・ジュニアと小泉三代目が話をする、安倍三代目と話をする、というのと違うんだよ。教育の問題であり、人間の実質の問題なんだ」(同)。

このように指摘することで鶴見は、現在の日本社会のありかたに根本的な疑義を提出する。

五

さて鶴見は、前述のアメリカの場合には、この認識をミレニアムという言葉で表わしたが、日本については、末法という言葉を使用する。末法とは中国伝来の思想で、釈迦入滅後の正法、像法の時代を経て二〇〇〇年後の一万年は、釈迦の教えのみが残り、悟りを得る者がいないという世が続くとされる下降史観で、その第一年月は、歴史的には一〇五二年とされている。鶴見は、この末法の時代状況と現代の状況を重ね合わせることで、現代の病巣を説明しようとする。そしてその際に鎌倉仏教の指導者の一人である法然の思想に触れる。

現代の状況についてこれが末法であることを、こう述べる。

「実は日本は現在、経済統計だけで見ると、世界の二流国です。国民所得などからいっても、一八番から二〇番といったところです。問題は、これからアメリカにくっついていけばまた一流国になれると。惨憺たるものですね。東大出が中心となっている大臣、官僚集団が、国民の支持を受けている。目を開いてみれば、実はいまこそ末法なんです。でも、目を開いているやつがないんだよ」(か・一〇七〜一〇八)。

高等教育機関である大学についても、同様の状況であるとする。

「東大で一番になつてもしようがないじゃないか。いまは世界の番付があるから、世界の番付を見ると(後略)。東大はもつと下。京大はさらに下だ。そうすると、もう一回一番に向かつていくということを考えるのが東京大学であり、京都大学であり、またあらゆる大学がそれに並ぼうとする。これこそ、末法でしょう」(か・一〇八)。

この状況は、ちょうど法然が出てきた状況と同じである。

「目を開いているやつはいらぬのか。叡山を下りた法然のときと同じ状態じゃないか、と私は思うんですがね」(同)。

法然の思想についてここで詳述する余裕はないが、鶴見によればそれは次のようである。

「法然の思想は、五条の橋の下で親が子供を食っているという空腹と飢餓状態の京都を見ていたことを背景にしている。そのもとをいえば、彼の父親は、彼が子供のときに殺され、父親は『仇を討つな』と言ったんです。(後略)／自分はとても助からないが、決して敵を恨むな。もしお前が復讐を思うなら、

争いはいつまでも絶えないだろう。仇討したら連鎖の中に入るから離脱する道は『南無阿弥陀仏』を信じてことだという。法然の個人史としていえば、それが彼にとつては末法の始まりですね。末法というのは一万年も続くのだからこれからもずっと続くだろう、すぐにこれから抜け出す道はないという、この認識がすごい」(か・一〇二)。

そしてさらに、一九七二年のクリスマスに救助されたアンデス山中の飛行機墜落事故と救出までの間に起こった深刻な食糧不足と人肉食にいたる遭難者たちの議論を例を出し、末法の時代の出来事として語る。

「そういうことは、これからも人間の歴史に起こると思うんだ。アンデスなんていまから三八年ぐらい前に起こったことでしょう。そして、いまも起こっている。見る目がないから、いま起こっていると思わないだけです。私はいまの末法は日露戦争に勝利した一九〇五年に始まったと思っている。だから、もう一〇〇年以上続いているんだ」(か・一〇五)。

この鶴見の視点は、近代国家批判の根本に関わる。そこには近代国家の国民を組織しコンクリート化していく方向性を末法の時代と見据えて、これと決別していかねばならない認識が存在する。そしてそれは、法然の場合には末法の世に対して『南無阿弥陀仏』という称号を唱えるという方向をとるにいたった。「法然はそれに対して、叡山の中で読んだ万巻の書の中から、一つの方向に向かってきているんですね。それは『南無阿弥陀仏』という称号だけを唱えれば——これは呂律が回らなければ『南無』というだけでもいい——それで救われる。『南無』以外の何も言わなくてもかまわない。どんなに悪いことをしてもいい。悪いことをした人間が、そのまま『南無』と言えはそれで救われる」(か・一〇八)。

「自分の死んだ子供を食っているやつがいる。『南無』と言えは、それで救われる。ばーんと来るでしょう。すごい思想だと思うね。目の前にそういう地獄があり、自分の周りは地獄であり、自分も地獄を支える一人だった。それが『南無』と言えは救われる」(か・一〇九)。

ここに現代の末法の世から離脱するヒントがあるように思われる。もちろんそれは法然のように「南無」と唱えることではない。前述のアメリカの場合にその母胎、基盤に戻ることが有効な手段であったように、日本の場合も、その母胎、基盤に戻ることである。

六

前節の問題解決の一つの方向を、鶴見は、プラグマティズムの原形的なあり方に見るが、それは例えば次のように語られる。

「生物は、生きる知恵を身につける。／人間も、個体として生み落とされたあとから、自分として生きる知恵を身につける。その前から種として、また、それぞれの地域に生きるなかで、生きる知恵を育てる。それが土法です。それぞれの地域の土法は、プラグマティズムととらえることができる。／(前略)ラッブ人——彼らにとつてはサーメ人と呼ぶほうが偏見をさける意味でいいらしいけれども——は、雪の種類にくわしい。学者として分類するのではなく、雪中で暮らしているので、それぞれの雪の状態にあわせて自分の暮らしかたを変えてゆかなくてはならない。だから、雪の概念そのものが、自分の今の暮らしについての実験計画である必要がある」(た・二〇一)。

人間を含む動物はもちろんのこと、生物は、自分なりのやり方で生きてきたのであり、そこでの生き方、自然への働き方こそが基盤とならなければならぬということである。このような広がりを持つ視点は、さらに日本の社会的場面においては、仏教との関わりへと繋がっていく。そしてその例を鶴見は、内山節の理論(『共同体の基礎理論』、二〇一〇年)に見る。その要約によれば、「日本の中で山川草木悉皆成仏というふうには仏教を取り入れて、自然の中のさまざまなものに対する敬意の中に、仏教の教理を入れ込んでしまった。このことが日本の仏教の根本で、それが共同体を支えているという考え方だった」(か・一七五)。

ここに鶴見は、社会とかわりを持ちつつ、自然と繋がる可能性を有する局面を獲得する。内山の前者からの次の二つの引用文は、このことを示している。孫引きで恐縮ではあるが引用する。

「ある日私は村人の葬式に出席した。司会の方が、〇〇家は神道ですので葬儀は神道式で執りおこなわれます、と告げた。と、当然のように僧侶が入ってきたのである。そして当然のように読経をはじめた。そのうち『焼香』となった。それは確かに神道式で、柩を捧げ柏手を打つものだった。読経がつづくなかで。私はびっくりして周りをみたが、誰もこの葬儀の方法を不思議がる者はいなかった。それはあまりにも堂々とした神仏習合の形式だった。／村の信仰

は、仏教も含めて、教義で展開していないのである。あくまで自分たちの生きる世界と不可分のものとして、信仰はつくられている」(内山。鶴見の引用では、か・二〇六)。

「そして自然への信仰と道教、仏教を融合させながら、自然と人間の世界を生と死の世界を自分の暮らす時空にみいだしてきた人たちの文化圏、この文化圏のなかに生まれたのが日本の共同体である」(同。鶴見の引用では、か・二〇七)。

ここに共鳴しつつ鶴見は、一方において現代社会批判の視点を定め、他方において自らの諦観に近い心情を語る。

「自然と仏教と神道がこんがらがっている。これが私の考えている、とりとめのない輪郭が全然はつきりしていない仏教なんです。でもこれが実行されている。生きられているんですよ。これが失われると、相当不安になってくるんですね。医療が発達してきて、長生きするんですが、長生きした人たちは社会中に閉じ込められている。幸福でしょうか。それは相当疑わしい。そうすると、その老人たちの活路は、ボケることだけです。ボケると感覚が鈍くなっていくから、ボケることには活路がある。それ以外に活路があるのかというのが現在ですね。これに対する答えは、(中略)内山節にはあるんです」(か・二〇七)。

この鶴見の結論をどう見るか。近代国民国家批判の視点を見据え、それをそれぞれの土地での伝統に基盤を置く生き方とする提言は、確かに耳を傾けるべき教訓を持っている。このことは鶴見の貢献として評価されるべきものであろう。しかしここから共同体の再構築を探り、自然との繋がりを探る道は、現在における共同体理論(例えばアংশエーションの理論)の検討を抜きに語ることはできない。それ故鶴見の提出した課題をより実り多きものにするためには、この方向での探求が求められているのである。

註

① 鶴見俊輔、ダグラス・スミス『グラウンド・ゼロからの出発』二〇〇二年、

光文社、五五ページ。

以下本書からの引用は、(グ・五五)等と表記する。

② 鶴見俊輔『未来におきたいものは』二〇〇二年、晶文社、二六九ページ。

以下本書からの引用は、(未・二六九)等と表記する。

③ 鶴見俊輔『たまたま、この世界に生まれて——半世紀後の「アメリカ哲学」講義』二〇〇七年、編集グループSURE、一九八ページ。

以下本書からの引用は、(た・一九八)等と表記する。

④ 鶴見俊輔『かくれ佛教』二〇一〇年、ダイヤモンド社。

以下本書からの引用は、(か・一〇六)等と表記する。